吉井勇論（5）――第一章　家系　その五

鷺　只　雄

はじめに

私はこれまでに吉井勇について二つの拙稿（吉井勇『酒ほがひ』［明43・9・7　昴発行所］に全注釈と解説を施した拙著［明治書院・近刊予定］及び「吉井勇論序説――初期習作と家系をめぐって――」［平8・3・14「国文学論考32号」都留文科大学国文学会］参照）を書いただけの、短歌にも、勇にも全くの門外漢であるが、その素人の気楽さから率直に言わせてもらうと、吉井勇の研究は非常に遅れていて、伝記の面でも作品研究の面でも基礎的、基本的な調査さえ行われていないのが現状である。勇の第一歌集『酒ほがひ』に全注釈を施す仕事をしてみて、そのことが肌身にしみてわかると同時に大いに困惑した。家系や伝記について信頼すべき調査は殆どなされておらず、勇の回想に従っているのが実情で、そのため回想には思い違いや齟齬が多く、それが何時のことなのか、それが本当なのかどうか、判断できない事態に遭遇することになったからである。

また作品についても同様で、作品の初出調査もごく一部になされたのみで、永く放置されたままであった。

そうした状況からの前進をめざして前掲の拙稿では資料の新たな発掘と調査とを試みた。これに対して早速、歌人で短歌史研究の重鎮である篠弘氏が「東京新聞」の「短歌月評」（平9・1・5　2面）で、

子規・左千夫・茂吉をはじめとする根岸短歌会にたいして、新詩社の「明星」派の歌人研究が遅れている。夭折した啄木ぐらいではないか。『白秋全集』が完結した白秋もむしろこれからである。鷺只雄「吉井勇論序説―初期習作と家系をめぐって」（都留文科大学「国文学論考」32号）といった研究が、ようやく出現してきた。

として、紹介して下さったのは望外の幸であった。もっぱら二十世紀の小説を研究対象としてきた専門外の私にとってはこれは大きな励ましであり、稿を続ける上での支えとなったからで、氏のご厚情にあらためて感謝しておきたい。

前稿にも記したように、吉井家の家系――特に祖父友実についての膨大な資料と父幸蔵についての資料については既にマイクロフィルム化して入手してあり、目下解読・整理中であるが、B4判で恐らく一万枚を越すと思われる分量であり、書類・書簡の年月日決定・更に殆どが達筆な毛筆で書かれていてその判読に時間がかかるなど困難な問題が山積しているため、それら全てが解決してから発表ということになると、いつのことになるかわからないので、とりあえず、祖父友実の日記を整理要約して彼の生涯の行実を明らかにした上で、周辺の事実を積み重ねていくことにしたい。

祖父友実から始めるのには、幕末まで「薩摩藩の軽輩」（吉井シヅ子［勇の母］「私は百二歳・一世紀を生きてきて」昭和42・3「文芸春秋」　引用は山崎朋子編『女の生き方40選　上』平7・4・10　文春文庫　による）であった吉井家を友実が、西郷隆盛や大久保利通と共に国事に奔走して大いに家名をあげた中興の祖であるからで、彼は明治天皇の信任厚く、伯爵となり、元老院議官・日本鉄道会社社長・宮内次官・枢密顧問官などを歴任した（一八二一年生まれ～九一年没）。

また、友実は勇の言によれば「歌の師」（「解説」昭27・7・25『吉井勇歌集』　岩波文庫）でもあるからで、実際残された資料からみても、友実は自由に歌を作り、知友と歌会を催し、絵を描き、歌日記や紀行文をものするなど、殺伐無風流な薩摩隼人とは大いに趣を異にし、風流韻事を楽しむ風雅の士でもあったことを証しているからで、その点からも友実の究明は重要であるが、その点については前掲の拙稿でふれたのでここでは繰り返さない。

ここで友実の日記というのは宮内庁書陵部蔵『三峰日記』のことで、一から七まで全七冊あり、明治2年2月26日（本文を除いて題簽類は「自明治二年五月」と記すが、これは臨時帝室編修局で大正一一年一一月に吉井家から借用して転写した際に誤記したものと思われる。というのは本文は「明治二年二月二六日」から記述されているからである）から明治21年1月10日まで記されている。

無論、途中の脱落も多い。

先程もふれたようにこれは原本ではなく、毛筆による転写本なので、体裁については簡単にふれておくと、和綴じの冊子本で、タテ27・3センチ、ヨコ20センチ、タテ罫一頁10行。第一巻の本文記載頁数は一三七であるが、これは巻によって多少の異動がある。参考までに記すと、日記の本文記載頁数は次の通り。

一――一三七頁（明2・2～5・5）
二――一五二頁（7・3～7・12）
三――一五九頁（12・1～12・12）
四――一六六頁（13・1～13・11）
五――一四三頁（14・1～14・9）
六――一八四頁（16・1～16・12）
七――　八〇頁（17・1～21・1）

繰り返して言うが、以下の日記の記述は「三峰日記」の翻刻ではなく、私が必要と思われる部分を取捨選択の上、それを整理し、要約したものである。原文を一、二例示する。

明治二年二月二六日

中将公前浜御乗船正午御出帆同二八日夜十二字大坂川口へ御着船

同二九日御上陸本願寺へ御宿陣相成ル
岩倉卿御在坂ニ付淀橋御上リ場ヨリ直ニ御使者被仰付
長州侯ニハ二六七日頃御上京相成候由承ル

永山源蔵へ公用人被仰付候御書付相渡ス岩倉卿へ二ケ條之御趣意申
上云々ノ御返答アリ
三岡八郎会計方被免長岡左京御召捕相成タル由
函館千人計決死其外瓦解ノ勢ニ候由
東京奥羽之間平穏
攘夷家盛ニ成立有志会ナド有之候由
木戸未タ帰京無之広沢病気ノ由

同年三月五日
林良輔野村右中建白書持参今晩入御覧候所願クハ両藩御寵遇之願意
列藩へ推及一視同仁之叡慮貫徹仕候様之御趣意書加へ方御沙汰有之

原文は右のような漢文訓読体・漢文体・候文体などの混淆した独得の文体で書かれており、また、日記であるために人物の説明などがなく、しばしばイキナリ固有名詞が登場するために理解の困難な部分もある。

凡例

以下に本稿の日記を記述するに当たっての凡例を示しておく。

1　原文の趣を出来るだけ尊重して文語調を模したが、表記は新字、新仮名とした。但し、詞書、和歌などについては原文通り旧仮名とし、その他の場合についてはそのつどことわった。

2　友実の行実を主としたために、それからズレルものについてはカットしてあることをおことわりしておきたい。ただし、固有名詞についてはできるだけ拾い上げることにした。

3　外国の地名の表記で確認できるものについては、可能な限り今日の表記に改めた。同じく人名については確定しがたいものが多いので原文の表記のままとした。

4　誤記・誤脱と思われるものについては改めたが、中には（　）を付して。その中に正しい表記を示した場合もある。

5　時刻表示は1～24時制とした。

6　（　）内の記述はことわりがない限り、鷺の付した注である。

7　以上がそのあらましであるが、これ以上の件についてはそのつどことわった。

以上のようなまえがきと凡例を付した「はじめに」をつけて拙稿「吉井勇論（1）　第一章　家系　その一」（,97・3・31「都留文科大学大学院紀要1」）同「吉井勇論（2）第一章　家系　その二」（,98・3・23「都留文科大学大学院紀要2」）「吉井勇論（3）第一章　家系　その三」（,99・3・23「都留文科大学大学院紀要3」）「吉井勇論（4）第一章　家系　その四」（,00・3・25「都留文科大学大学院紀要4」）を発表した。本稿はそれに続く第五稿で、明治16年4月1日～同16年12月1日までの期間のものである。猶、冒頭に記した拙著『桐の花・酒ほがひ』（明治書院・和歌文学大系29・今西幹一氏〔桐の花　担当〕との共著）は98年4月15日に

刊行された。

五

明治一六（1883）年（承前）

4月1日　熱海へ遊浴のため、なほと子供四人、乳母二人、都合八人で八時の汽車で出立。鎮武が新橋まで、幸蔵は品川から神奈川まで見送りに来る。この二三日前からお静殿病気の由を聞く。12時過ぎ藤沢に到着、昼食後13時30分出立、15時馬入川を渡り、18時ごろ小田原の中松に到着し一泊する。今夕酒匂川近辺風が強く、甚だ困難する。箱根山には雪いまだ消えず。今朝出立前、岩公に皇居造営の件を申上げておく。

2日　7時人力車で小田原を出立し、由浜に到着。未だ11時前で刻限は早いが昼食にする。岸良夫婦の熱海より帰るのに会う。12時過ぎ熱海に到着。得能、医王寺の下まで迎えに出ており安心す。直ちに連れ立って不二屋沈流亭に宿す。晩景川村、末川を訪うも皆不在。夜、良岩来る。

明治10年鮫島尚信と同游せし時金二十円ずつ村民に与え、小田原から車道を開くべしと勧誘せしにその後官民相応じ遂に車道落成、今日初めて人力にてこの地を通過し甚だ心よかりき。ただ尚信既に世を去り、この道を見ざるを悲しむなり。

3日　得能と共に渡久元の帰郷するのを送り、そこから海蔵寺辺を散歩し、同寺に入り閑話やや久し。午後二楽亭に移り、16時頃より雨。川村来訪、寛話密に入る。荒川より書状来る。

4日　真誠社主人来訪、村中散歩。夜、末川来る。

5日　子供を連れて伊豆山に行き暫時、海楼に憩う。帰途、得能を訪う。夜、川村で話す、末川も来る。

6日　今日荒川より書状来る。寒気甚し。和歌一首を詠み得能へ送る。

玉敷の都の春もさりながら
今年は波の花にくらさむ

7日　川村、末川来る。川村曰く朝鮮事件の頃御前にて御評議あり、今の海軍では到底見込み無く、せめて三六艘ばかりも用意が無くてはとても平和を唱えることは難しいと末川が話すと、兵器局の大河平某の工夫により坩堝を発明せり。土は隅州躍郷より出ると。又鋼鉄も製出すると言う。又山本の話に「コーカス」と「コサック」とは人種別にして乗馬の達者なること妙なれども馬を離るればとんと役に立たざるものなりと。白杉より書状来る、明治会堂の件、ドコービール到着の儀申し来る。

8日　得能来たり12時頃まで談話。昼食後より三島街道の新道を登り峠に達す。山上の日金の宿坊より茶屋を建築するとて人足共二三人焚き火をしていた。暫時煙を吸い下山、18時宿に帰る。随分疲労をせり。4里の行程なり。伊藤勅典より書状来る。

9日　得能帰京につき、伊豆山まで送る。天気快晴、今日は旧三月の節句也。川村にて薩摩寿司の馳走になる。

10日　末川と古屋を連れ築港場見分。夜、静岡県令大迫貞清来る。末川の宿で鶏飯馳走になる。山本も来る。維新の頃の昔話いと興あり。伊達老公は不二舎へ来宿。

11日　大迫より興津鯛到来す。大迫の主催で網曳、鯛の獲物あり。大迫にて昼飯。伊達公二楽亭へ来訪。林、大田黒より書状来る。

12日　温泉寺住職来訪、半十郎なる者樹木を仕立てて篤実なると聞き、晩景同人の宅を訪う。いかにも正直なる老人なり。海岸松の種を送ることを約束する。

13日　諏訪山辺を散歩。

14日　岩崎弥太郎、昨日来たとて今朝訪ねて来る。彼の主催で午後網を曳く。夜伊達公と岩崎宅へ行く。

15日　終日雨、退屈限りなし。末川と落語家などを呼び、日を消す。黒田長博君来訪、照国公と交情最も深き御方也。

16日　黒田公を訪う。照国公記念碑のお話があり、御像は鎧直垂にてはいかんとのことなり。伊達公来訪。藤井、村山を黒田老公潜めたまいし一件の書状数通を見る。実に驚き入る尽力、大いに感激せり。

17日　森田、皆山来訪、画話あり末川出立に付、医王寺下まで送る。午後岩崎来る。伊達公、黒田公を訪い、散歩に同道し、諏訪山に登る。帰りがけ野原にて茶飯を喫す、これ岩崎の設けるところなり。夜、岩崎にて義太夫を聞く。酒を強いられて甚だ困却す。

18日　今朝、岩崎出立、午後、伊達公と海蔵寺に行く。帰途、余は魚見山に登る。夜、井上、勝、鹿島を連れて来る。

19日　今日船で、伊達公父子三人、家令大西、井上、鹿島らと網代に渡り午餐。井上自身で料理す。帰りは陸路、雨降りだし、甚だ困却。

20日　今日井上昼より出立、帰京。

21日　夜、伊達公に招かれ晩餐。

22日　伊達公より桜一枝に左の歌をつけて送られる。

散らぬ間は君いまをよと桜花
我が物顔におくる一枝

返しに読みておくる

君が住む花の宿りを余所にして
かへるもおしき伊豆の山本

夜、伊達公父子来訪、晩餐を出し落語家を招く。矢板武昨日来たとて来訪、奈須開墾話など聞く。

23日　今朝曇天なれども断然出立、帰途につく。13時小田原着、中松にて午餐。それより車を雇い湯本に登り、福住晩翠楼に一泊。山上の桜花満開、さぞかし夏は清涼ならんと想像す。塔之澤に散歩、福住別宅にて喫茶。

24日　6時湯本を出発。

鳥の音や花に明行箱根山

南郷に到着は、11時なれども午餐。藤沢より神奈川まで道路泥濘、すこぶる難儀。16時半過ぎ停車場に到着、17時発の汽車に乗る。実に間髪を入れざる場合なり。

18時帰宅。源左衛門、謙次郎を連れて新橋まで迎えに出る。

25日　会社に出頭、不在中の事件を巨細に聞く。また工部省に出頭し、井上、中井らに面会。また十五銀行に立寄り池田章政氏に代理を頼んでおいた礼を述べる。税所、伊地知、本田に連絡をしておくも行き違いで来ず。宮島一人来て種々話す。

26日　今朝、税所来る。談話数刻。12時前に出社し帰りがけに塩湯に行く。また税所へ行く。勝、福田、玉中、宮島、伊地知ら来る。

27日　今朝、元田氏を訪うも不在。書を以て中講義の件を頼みおく。それより大蔵省へ行き、藤島に面会。講義の一件引き受けてくれるよう頼んでおく。また農商務省へ出頭し、品川に面会、旧明治会堂拝借の儀を頼みおく。理事会は問題なし。井上局長より限界条項取り調べるよう手紙来る。

28日　13時ごろより税所と得能へ行く。同人大いに喜ぶ。談話に時を移す。それより中通にて古切れを買い、また池田という骨董屋で書画を見る。顔輝の達摩などあり。林徳左衛門に立寄り晩餐。20時より日本銀行開業式に行く。甚だ盛んなり。風強く提灯に火を灯すことあたわず。23時帰宅。

29日　大滝新十郎来訪。税所へ行き、午餐。それより東海寺へ行き画幅を見る。又平の黄石公は名画なり。能楽堂へ行き、桜間の道成寺、九郎の鞍馬天狗を見る、いと面白し。本田に立寄り、また林乾徳の招きに応じ、22時前帰宅。

30日　井上鉄道局長宅に赴き営業一條の談判に及び都合よくまとまる。15時退出、塩湯に行き、それより紅葉館に於て三條公始め催すところの旧交会に出席。

5月1日　宮島、中井、会社に来る。荒川、松永等を局長に遣わす。黒田清隆より明後日11時よりの招待状が来る。夜、恒庵へ行く。

2日　石井電信局長朝鮮へ出張に付新橋まで送る。夜、会社の人々十人を饗応す。吉原重俊来訪。

3日　11時黒田へ行く。副島、大隈、大木、佐野、税所、西村、安田等同席。大神楽並びに踊り等さまざまの余興あり。晩景までおいおいに退散。税所、西村と三人22時頃まで残っていた。そのうち黒田から段々に真実の話が出て誠に感激に堪えず。猶、副島、大隈へも趣意を伝えてくれるようとの頼みに付委細承諾して帰宅。副島へは11年ぶりの面会という。

4日　今朝10時より大隈へ行き、黒田の趣意を申し述べたところ、同人より明治11、2年頃より国会建白の始末、また今日改進党組織の趣意まで逐一話し、12時に及ぶ。余答えて曰く、お話の趣承知、今日は先ずこれにてまかりかえり、おいおいお引き合わせ致すべし。それより会社に出て理事会で営業一條の御依頼を致すべき旨の願書を工部卿代理山県に向け出すことに決定。この儀についても種々情実これありそうらえども先ず可也。

折り合い相付け候。それより塩湯へ行き、税所、宮島と晩餐後帰宅。

5日　今朝、黒田へ行き昨日大隈に面会の次第を話し、12時になり午餐致すべしのことに至る経緯をゆるゆる話す。そのうち強雨、雷鳴。そこから松方を訪ねるに、仙台坂の屋敷にいるとのことにつきそちらへ赴き、積もる話を語り大いに面白し。同人より支那一條、機密の話、三菱検査のこと等残らず聞く。晩景より、前田正名、久保八郎来る。今日、英介初節句に付余は先に帰る。

6日　9時家を出、税所と宮島に会社で会う約束をするも、着いてみれば税所の車なし。もし来たらば精養軒で戯球をして10時まで待つと言いおいて先に行くが来たらず。宮島と二人副島種臣を訪問、先生欣然として出迎えり。黒田の趣意を伝えると大いに喜び、黒田の精神感服無限、近頃食事進まざるところ、過日大木にて黒田に面会以来は食事も進み候とのこと、且つ今後国憲を立るに、君父の権に立ち入らざるようにこれありたく、その余は何事にても議すべしと廟堂一致、且つ地券一條改正ありたく、これを黒田にすがり是非やりつけ申したく、最早余命もこれなくただこの二条は是非是非存命中黒田の力を借り、やりつけたしとのことお上に申上げ候ところ、竜顔に御涙を浮かべさせお聞きあそばされ候とのことであった由。昼飯の馳走を受け退出。新燧社を見、亀井戸天神と藤を拝し、本日は神も嬉しからんと宮島と言い合い、甚だ愉快なり。歩いて帰る途中水本の牡丹を見、宮島所有の浜町の屋敷を見る。難波屋という料理屋に上がるが不都合千万。食後歩いて22時前に帰宅。

7日　朝、鉄道局長井上を訪うも不在。過日提出の願書は異存なしとの伝言あり。藤島、会社に来る、元田云々の件を聞く。野津の牡丹を明日見に行く約束を今日と間違え、空しく帰る。

8日　今朝、宮島来る。内務省云々の件を聞く。出勤の途中松方に会い、種々の話を聞くが、わざと記さず。夜、井上、児玉、西内、大久保を日本橋柏木亭に招く。来る15日米花堂に於いて元田先生を招いての書経の講義は差し支えなしとの連絡が藤島正健よりあり、直ちに税所その他へ通知する。

9日　工部省に出頭し、林董に面会し同道して会社に行き、運転一條につき種々談判する。16時塩湯に行き、税所、宮島と出会う。それより本田へ牡丹を見に行く。今朝児玉少介来る。皇居造営の件につき、天皇の意向と、造営係の間に種々もめごとあるやに聞く。

10日　大山帰京につき、出勤途中に立寄り、午餐後出社。川村へ行くも不在。安場へ懇親会に行く、中村、楠本、若山、城多等なり。

11日　理事会で林工部省大書記官への返答の件決定。夜、税所来る。

12日　井上勝を訪い、運転一條につき談判。16時より大蔵別荘に招かれる、鬼塚、北川等が幹事なり。横山孫一近々

上海へ出店の由。花柳という踊りの師匠が来て、隅田川を舞う。22時前に退去し、墨堤緑陰を散歩し、いと快し。24時前帰宅。

13日　今朝、宮島と同行して黒田清隆を訪う。それより隣農会へ行く、一柳、梅塘、鵬北等来る。帰途松方へ行き、書画を持ち寄り大いに面白し。森田、皆山来る、西内も来る。

14日　大久保五年祭につき参拝。参議井上、山県、大木、西郷、松方、大山等も来る、立食あり。晩景青山へ墓参。岩崎弥太郎に肴、煙草を贈る。

15日　16時より米花堂にて元田書経講義の初回。谷干城、鎌田、安場、税所、宮島、中沢、下条、一川、藤島、江口、野田等出席。

16日　今朝より岩崎弥太郎等と熊谷行きの約束をしておいたが雨で果たさず。10時ごろから晴れ、大蔵省へ出頭し、郷純三に面会、村上願望一條につき相談。それより上野で午餐。増田、島崎とドコービール。王子まで建築場見分。扇屋で喫茶。上野へ帰ったところへ井上局長、横山孫一も来会。馬車で塩湯へ行き、三縁亭で晩餐。22時頃帰る。

17日　会社より塩湯に行き、それより伊地知、一柳を訪う。後から吉田清成、宮島も来る。

18日　今朝、副島種臣来訪、昨日黒田清隆を訪い、二、三カ条談合の事を聞く。三條、岩倉両大臣より明日任有軒にて撃剣会展覧につき陪席の連絡あり。理事会で運転上上げて鉄道局に依頼することに決定。当月以来紛議百出の件漸く本日決定に及び大いに安心せり。16時より大木氏の招きで行く、有栖川宮、山県、山田、大山その他数名来会。

19日　今日、白杉、工部省へ出頭し、林董へ運転は上げて工部省に依頼する願書を出す。13時任有軒に参上し天皇臨幸の撃剣を見る。

20日　税所来る。午餐後、同道して今村を訪い、それより中山道具入札場、泉橋精工社へ行き、硯石一箇を買う。それより塩湯に一浴、松金にて晩食、狩野も来る。狩野宅で古法眼酒の君並びに鷹の絵を見る。松金にて黒田に出会い、暴飲甚だ困却し、漸くにして退散。

21日　今朝6時過ぎ出発し、上野で平田、村上、岩崎、河田、二橋、森田、瓜生、橋本等と出会って、トロリーで王子へ行きそれより汽車で浦和に着き、春泉亭にて午餐。汽車で出発、13時過ぎ熊谷着、泉屋へ上がり暫時休息。武井の別荘、熊谷寺など一覧す。夜、本間を始め鉄道局の人々多数来たり飲食す。

22日　朝7時熊谷出発、本間、屋代と深谷駅まで線路見分。暫時休息。12時前熊谷へ帰る。西内、宮内他一人来る。午餐を振舞ってから停車場へ出て14時発車、1時間30分で浦和着。川口で毛利、国沢に面会。王子で岩崎、平田と別れ、トロリーで18時上野着。それより人力車で帰宅、晩餐後、千坂を訪う。

23日　今朝、宮島、下条来る。午後塩湯へ一浴。それより千

坂の招きで行き、石井省一郎、宮島、本田、高崎等同席し、大いに興あり。

24日 今朝、玉忠来る。花活けと根来の大盆を買う。十五銀行へ30万円借用返弁一礼のため林賢徳と同行。三島を訪い、税所へ行き晩餐後、松方を訪い営業一條内閣評議の節云々を頼みおく。林董来社、山県参議より営業一條云々の議が在りし由連絡あり。大脇、今日転宅。

25日 今朝、山県参議に面会。これまでのことを一通り申し述べ先だっての願いを是非趣意どおり許可下さるよう申上げたところ、鉄道一條は最初より一論これあり、岩公へもしきりに論じそうらえども難しくこれまで一言も申さず候。この節の議に及び強いて我意をはり候わけにはこれなく、内閣の評議もあるべしとのことにつき、よろしく願いあげて退出。理事会にて前条の次第を報告し、いずれ山県よりの返答によりいかようにも評決すべき旨の鬼塚の提案により一決。夜、大山来訪につき、猶前条の件を頼み置く。今日内閣にて山県より話在りし由。天神に参詣し、夜市を見る。

26日 昨夜より強風、長崎、高知辺強風の電報在りし由。税所、中井会社に来る。それより中井に行き午餐。大山、加藤、大久保等来る。夜、川崎へ行き、書画を見る。加藤より欧米の鉄道会社の成立を聞く。

27日 宮島と能楽堂へ行く。帰りがけ塩湯に行く。大給恒来訪、君側のことねんごろに話し、このことは三大臣へも申し立ておき候とのこと。

28日 午餐後、税所、宮島と南洲建碑地所見分のため、木下川青龍山浄光寺へ行く。玉忠は先に来ていた。本山は慈覚大師の開基で千有余年になるという。門前の茶店で茶漬けを食べ帰途につく。宮島と人形町の夜市を見、本箱2個を求む、2円50銭なり。

29日 今朝、東久世通禧入来、君側云々の話あり。安場来る。吉原会社へ来る。何幸五の母、死去につき悔やみに行く。福原に招かれ、売茶亭に行く、児玉少介、渡辺洪基、中井、西郷等来る。松方来れりという。

30日 松方出立に付き、12時前より行く、山県への談合は願通りになるべき旨と聞く。帰途、塩湯に一浴。夜、宮島、金子来る、中島信行の支那行き、陸奥の洋行の儀を聞く。

31日 澹泊会に墨蘭を出す、7点なり。夜、宮島へ行く。東次郎、曽根俊虎に面会する。チーフー領事館の儀を聞く。本田来訪、大給、東久世の儀を聞く。東久世を訪うも不在。

6月1日 今朝、大山を訪ね山県に願書通り速やかに処理してくれるよう依頼する。井上勝、大山へ来る。同車して宮内省へ出頭し、御召し車の一條を卿と輔へ申し出る。元田に面会し、来る5日より7日までに面会を約す。拝借金年賦上納願いの儀、平田より主任官へ願い候ところ、差し支えなしとの返事を村上が来社、連絡在りし故、その段理事会に報告する。得能へ行き、税所、池田に会う。大隈へ行くも不在。

2日　午後、会社より中井へ行く、吉田清成来る、中山王を琉球に返し充分活計の立ち候様お手当つかわさるるを全く度外視し、王一己の分を以って支那へこれまでの通り礼節を尽くし候よう仕向け、日本よりは黙許しおかれ候ては如何と申談候ところやや同意のように相見得候。寿美屋へ書画会に行く、松尾、伊集院、久保、税所、川崎、池田等相会す。帰りがけ安田へ行く、西郷、奈良原等来ていたり。

3日　大隈より早稲田の別荘に招かれ、昼飯を馳走になる。落語家来たりて吉原の高尾の話を聞き、いと面白し。また、庭園風致に富み目を喜ばしむ。副島、黒田、得能、税所、大久保等同席す。17時頃帰り、塩湯に行き、また三縁亭に行き晩餐。今日出がけに山県へ立寄るも不在。海軍端舟競争会あり、子供等一同見物に行き、夥しき見物人なりしと。

4日　新橋分局へ出頭し、お召し車などの製造を見る。15時より菓子商栄太楼の別荘に招かれ、税所と行く。茶あり、雪舟の大幅を見るに実に名画なり。夜、副島種臣来訪、旧交を全うせんがためにとて太刀一振りを贈られる。恵鉄作にして作は左なりという。家康が関ケ原の陣に帯びたものといい、皆葵の紋が散らしてある。種々親密の談話に及ぶ。頃日、安南事件あり。

5日　今夕、種子田誠一に招かれ、席上西の琵琶あり。樺山、野津、高島、税所等同席す。中井来社、今朝山県へ行き営業一條の件願いの通り決定と聞き安心せり。

6日　退社後、元田を訪う。皇居造営の一條につき、天皇は愈々節倹の思し召しにて和風でせいぜい質素に致すべしとの事を聞き誠にありがたく肝に銘ず。谷、出仕の一條をも聞く。勝等のこと申し入れておく。

7日　太政官に出頭し山県に面会し、営業の件につき礼を言う。中井、明日より上方に出発に付き、同行を申し入れるも未だ指令無きため許可ならず、又大隈のこと如何と尋ねるに、最初の情実残らず話しおきたり。また鉄道は政府で敷設するのがしかるべきとの話しもあり。会社へ出て前条に次第を検査委員に報告しておく。塩湯に一浴、中井へ行き、また大椿楼へ集会、この夜初めて小松原英太郎に会う。

8日　中井今日より上坂。本田を訪い、三縁亭に行き晩餐。理事会で品川線路評議委員を設け取調べの儀に決す。

9日　本日15時頃より久し振りに在宅。税所、池田昇、宮島、山口、大脇等と会食。

10日　15時頃より能楽堂へ行き接待、九郎望月金春松山天狗金剛などを見る。本田と三縁亭にて晩餐、戯球。岩崎弥太郎、川田小一郎来訪。

11日　朝、8時過ぎに家を出中沢に立寄る。本日より同人信州出張の故なり。二人曳きで上野に行く。トロリーで増田、島崎と王子に行く。本日は得能の主催で副島、大隈、西村、黒田、税所、伊地知、大久保、市川等扇屋で出会い午餐。得能は昨夜少々不快の由にて不参。14時よりトロリーで大久保と上野に出、馬車鉄道で新

橋着。紅葉館の集会に出る。これは十五銀行より30万円借用の謝礼のためなり。他に坂田郡長相良、青森県大道寺某等なり。

12日　今朝、新橋へ立寄り、西内、内藤に面会し、鉄道局員送付の儀を相談する。本日好友会を拙宅にて催す。安場、中村、楠本、若山、城多等なり。幸蔵夫婦来宿。

15日　今日、山王祭礼、門前人山の如し。井上鉄道局長に用向きあり。荒川巳治同伴にて本日京阪に向け、14時45分発の汽車で出発。新橋まで理事、委員一同見送る。横浜三菱に上がり、黄龍丸に乗り組む。同船は四日市に向かう船なり。岩倉右府危篤の電報で具経、伊藤侍医も京都に赴くため同船す。18時解纜。税所、宮島来訪して告別。

16日　遠州灘、波穏やかにして、本日17時四日市港着。直ちに宿に至り、食事。夜、亀山に止宿。四日市より5里ほどあり、車夫終夜騒然として眠ることあたわず。

17日　朝、4時半水口京屋に立寄り金一円を投ず。狩野古法眼の筆捨山など一見す。維新後初めてこの道を通り、大いに興あり。14時頃大津着。井上等今朝より長浜、敦賀に赴きたりと聞き、直ちに電報を打つ。夜、京都鍵屋に止宿。

18日　今朝、井上外務卿を訪う。それより岩倉右府の旅館に至り謁見す。鉄道一條委細上申。右府の容態甚だ悪し。後、加茂御霊北野に参詣す。この2、3日来炎熱甚だし。夕飯後清水へ参詣。富岡鉄斎を訪い、瑞光院再興の儀を聞く。

19日　相国寺に参詣。午後、外務卿の招待で迎賓館に行く。佐々木、井上、中井等長浜より帰る。面会して一通り鉄道の話に及ぶも、十分の返答なし。井上は今日より神戸に転ず。

20日　伏見稲荷に参詣。午後、万亭別荘にて佐々木、中井と囲碁。篭手田県令も来る。荒川今日より神戸に下る。

21日　朝、岩倉公を訪い、今日より下阪のことを申し述べる。15時の列車で中井、福島と同行して自由亭にて止宿。夜、福島の主催で富田屋に遊ぶ。

22日　午前、松方を訪う。夜、松方、中井、加藤、福島、五代等と自由亭に会す。本日、山中吉郎兵衛に行き書画を見る。益田、小室等も来ていたり。雪舟、秋月、探幽の三幅を買う。光来れりとて柴田来る。疋田来訪、明日より帰県すという。

23日　市村へ行き、和尚と碁を囲む。住吉に参詣。夜、建野を訪う。

24日　午前、松方を訪い、告別。午後、中井と神戸に下る。諏訪山に止宿。井上は今夕より四日市に向けて出発、それより帰京すという。村の、赤星等に面会。佐々木もこの地に滞在せり。

25日　午後花壇に行く。夜、酒宴、森岡等も来る。岩公本日西京より下向。

26日　黒田清隆、岩公の病気見舞いとして昨夜到着とて来訪。今夕東京丸に乗り組み、18時解纜。岩公父子、井上外

務卿、伊東、桜井等上等客甚だ多し。高橋新吉、米国より頃日帰朝の由にて同船。

27日　今朝、遠州灘を通り船頗る動揺、晩景伊豆の灯台を見る。外務卿と時勢の論にわたる大いに感服するの論あり。

28日　2時横浜着。昨夜より岩公の迎えに出て来たりし者多し。暫時林屋に休息し、8時の汽車で帰る。岩公の容態頗る篤し。会社に出て一通りの報告をし、直ちに帰宅。税所来る。

29日　本日理事会にて京阪の事情を報告。三條公に黒田よりの伝言を申上げる。今夕、井上帰京。

7月1日　井上に面会し、鉄道局不要の人員を会社に回して貰う件を依頼し、承諾を貰い初めて安心す。それより本田に行き、三縁亭で食事、戯球。

3日　今夕、長岡護美氏の招きに応じ、浜町の邸に行き、山県、山田、山口、水本、井上、尾崎、西村等同席す。山県と中仙道鉄道論あり。

5日　工部省に立寄り、塩湯に行く。少々下痢のため出仕せず。荒川の洪水甚だ心配なり。

6日　理事会に於いて、岩倉公の病気見舞いのため肴一折進呈のことに決定。瓜生、白杉、操替の儀報告。16時前より宮島と上野に同行し、それより塩田も同伴してトロリーで王子に行き扇屋にて晩餐。19時過ぎ上野に帰る。馬車に乗り塩湯に入る。塩湯本日より木挽町に新設。金玉均に面会す。

7日　大野義方宅で画会。川村、雨谷、本田、伊地知、高崎等来る。大いに興あり。夜、1時に帰宅。

8日　今朝、芳川を訪うも不在、金井を訪うもまた不在。宮島へ行く。副島も来て画を作る、副島賛あり。大雨降りだし帰宅、閑居。

9日　今朝、市来政平、荒川の手紙持参。理事会で井上に金一万円報酬として贈ることに決定。荒川満水、橋上のレール取り外した旨松崎より連絡あり。昨夕より強風雨冷気甚し。塩湯に行き伊集院に面会。元田から内談したいので来る12日に参上の連絡あり。

10日　昨日、荒川洪水の報知あり。朝10時ごろより出張、扇屋にて午餐。白杉も来る。それより川口に至る、おいおい増水の景況なり。国沢、小川等に面会。赤羽にて暫時休息。帰途、井上に面会。同人は、熊谷辺まで2、3日さし越すべしとのことなり。今日客車4両程上野に回す。

11日　今朝、警視庁に立寄り、副総監綿貫に面会、上野王子間取締りの儀を相談し、巡査4、5名を会社より費用を出して雇いたい旨言上。会社に行き以上の旨を白杉に連絡しておく。夜、一柳、梅塘、鵬北、栗香、伊集院、久保等を招き会食。

12日　会社に於いて営業会計の儀を決す。16時より元田を訪い、岩公愈々危篤の容態なりと聞く、且つ今後如何の見込みに候やとくと承りおくべき旨御内沙汰ある由につき、過日船中に於いて井上外務卿と談合の次第など

詳しく話し、又琉球事件黙許の一件も至極同意にて是非外務卿へ申し入れたしとのことに候。来る21日上野松源楼に於いて画会の儀ある旨近衛篤麿君より報知。

13日　9時15分の汽車で、林、何の両人と横浜に行き、オードリッチを訪ね、他日官設線と連絡の際の計算上の事を質問す。12時の汽車で帰り会社で理事会後、岩倉家に立寄り病気の容態を伺うに、昨夜少々よしとのこと、愈々来る25日鉄道の開業に付き、具経君にても名代としてご出席下されたしと申上げおく。尤も取次ぎを以てなり。

14日　東京府に立寄り芳川知事に面会。上野王子間の取り締まりの件につき依頼する。15時ごろより上野に行き、それより岩崎弥太郎の招きに赴く。成島柳北も来る。森田皆山の大師、不動の画、金岡の文殊の画、岩崎の米芾の山水等実に絶品なり。

15日　今朝、川村参議来訪。午前より宮島と同行して税所を訪う。税所は本日転宅なり。午餐後、塩湯に行く。副島一條相談。17時ごろより金玉均の招きで朝鮮料理の馳走にあずかる。食後、談話数刻、琉球事件に付き勘考はこれなきやと尋ねたるに戦にはなるまじ、如何となれば、支那より日本を見ること高く、また近頃日本より支那を見ることも難しく見ている様子、互に難しく考えおり候様子につき、必ず戦には相成るまじと存ずるとのことなり。馬建忠は天主教の信徒にて恐るるに足らざる人物なり、日本に償金を贈りたるを名とし、退けられたるもその実は宗旨の事より起こりし事なり。英独も朝鮮も独立と認め、条約を結ぶ模様なりとの事なり。大院君を支那に拘留している件を朝鮮人民は残念に思っているかと尋ねたところ、残念なり、との返事あり。21時ごろ帰宅。

16日　南、会社に来る。品川線接続の上政府と会社との関係を聞く。宮内成美、来社、元荒川の一條相談。精養軒に行き午餐。鉄道局より44人派遣され、辞令を渡す、これで安心せり。米花堂において元田先生の書経の講義あり。中村弘毅より欠席の連絡あり。

17日　工部省に出頭し、オードリッチに面会。品川線接続云々を林に依頼。今日、白杉等熊谷へ行く、駅長も同行。塩湯に行く、老婆大いに喜悦せり。井上局長宅へ行き、報酬一條並びに品川線接続の上官私計算上の件を総会までに決定しておきたい旨話したところ、いずれオードリッチに問い合わせよとのことであった。

18日　宮島と副島を訪う。

19日　三條公より参上せよとの連絡があり、参館。副島、黒田、大隈等と交際の由如何の模様に候やとお尋ねになられしかば、副島の王土王民論はご懸念に及ぶまじき旨ご返答す。岩公のご病気旦夕に迫り誠に致しかたなき次第なりと嘆息の様子顔色に現れ、心中察せられ候。それより直ちに岩倉家に参上、最早今生の暇乞いと存知、是非寝所にまかり通りたき旨申し入れ、具綱殿の案内で拝謁す、残念無限。

20日　朝、7時岩倉右大臣殿薨去。直ちに行きて弔詞を述ぶ。実に天下の為惜しむべく、市中の芝居、寄席皆廃業せり。

25日　故岩倉右大臣葬儀6時出棺、品川海晏寺に埋葬。大山と同車にて送る。市外左右人山をなす。炎熱焼ける如く、11時過ぎ帰る。理事会に出席。

26日　汽車の試運転をなす。

28日　鉄道会社営業を始む。

30日　会社総会を開く。

8月3日　伊藤参議等帰朝につき、横浜に出迎う。

13日　谷元種田の招きで、深川河村伝衛の別荘に遊ぶ。西郷、大山、川村、仁礼その他同郷人数名にて大いに興あり。

19日　税所、下条、狩野、吉田弘蔵等来訪、晩餐。

23日　長蛇亭にて澹泊会あり。津田寧野が会主なり。池の荷花誠に愛すべし。

26日　午後より税所に行き、同伴して一柳を訪う。閑談数刻、露国ウラジオストックに軍艦十艘余、歩兵二千人、常に駐屯し、その気力我国の及ぶところにあらずとの話あり。三韓征伐後の日本疲弊に及び、仁徳帝節倹を行わせ給いしならんと。

27日　この頃、仏軍安南の都城を陥落させたとの新聞記事を見る。夜、大山を訪う。今日安南よりの電報に、愈々清仏開戦に及びたりという。これ外務省へピットマンよりの知らせという。

28日　今暁3時に目覚め、4時に起床、5時に家を出、6時に上野着。汽車で熊谷へ赴く。北川、林同道。石井電信局長も高崎辺の線路見分のため出張とて同車せり。8時過ぎ熊谷着。直ちに本間英一郎等とトロリーに同乗し深谷近傍の砂利取場を見分。ここより汽車に乗り、榛沢架橋場を見分。それより又深谷に帰り、山本屋にて午餐。時既に14時なり。16時30分発で帰京。

30日　退社後、金杉塩湯に行く、税所も来る。狩野へ立寄る。古法眼の三幅対を見る。伊集院に行く、雪舟の山水あり、無類の幅なり。松方兄弟、富田悦阿弥も来る。今日昼過ぎより日輪光を失う。水蒸気空中に充満せば日色光なしという。或いは大風雨のしるしならんという。

31日　今朝、工部省に出頭し、井上局長の帰京を問うに未だ帰らざるとのこと。理事会で林を甲部長、太田黒を乙部長と定めたる旨報道す。星亨に返書の評議あり、長谷川に猶勘考してくれるよう依頼する。本日も昨日の如く日色光なし。

9月1日　今朝、井上局長を訪わんと工部省の下を通過すれば、楼上より招く者あり。顧れば井上なり。材木一條並びに種紙運賃の儀を相談に及ぶ。本日、寅治の誕辰につき同人を連れ、日枝神社に参拝。今夕、大脇、帖佐等を招き食事す。帖佐は頃日鹿児島より帰る、郷里の事情を聞く。今日も日光薄し、何か気味悪し。今朝より荷車5輌を増したりと。

2日　今日、紅葉館における有名会（原注――諸芸人を召集する会）に出席予定のところ本田や税所からの誘いで

それを取りやめて上野に行き、玉忠にいたり、午餐。帰りがけ得能を見舞い同家にて晩餐。宮島が昨日伊香保より帰りたると聞き、同人を招いて閑談。両井上、高島屋などの話しを島田の娘が語りたりとて種々聞き込みたり。今日、日色やや光を増す。

3日　今朝、佐々木へ行き、開業式一條の相談。井上局長不承知とのこと。それより工部省へ出頭、中井に面会、伊藤、松方、売茶亭にて懇会の儀を約す。また井上局長を訪うも面会できず。

4日　15時過ぎ塩湯へ行く。千坂、宮島等と会す。それより税所に行き晩餐。お重の一條税所より吉田清成に相談してくれる由聞く。

5日　今日少々不快、終日臥床。大山明日より北海道へ出発するとて来訪。幸蔵来る。

6日　今朝、大山へ暇乞いに行く。井上も北海道鉄道開業式に出向き候につき、林賢徳と暇乞いに同道す。それより塩湯に行き午餐。2度入浴。帰途下条へ行き、晩餐。秋月の山水の巻物、探幽の地蔵などを見る。

7日　本日出社のところ、気分優れざるを以って理事会を断り、木挽丁の塩湯に入る。金玉均より贈るところの手抜き唐辛子醤油、徳利等を持ち帰る。得能を訪ね、昨日より大いに良とのことで面会し暫時話す。それより中沢に行き、雪舟の鶴、雪村の布袋、永徳の巻物など持ち帰る。今日宮島にて晩餐。

8日　出社の途中、東京府に立寄り芳川に面会し、王子の地所、家屋一條を頼み、勧業課長田中正道にも面会し、有川のことも頼みおく。今日鎮武帰朝、金50円大山より借用して相渡す。

9日　本田、宮島来訪、午餐。揮毫。午後税所も来る。晩景より芝の塩湯に行き、帰りがけ税所にて晩餐、閑話。夜、久々にて秋雨降る、いと心地よし。

10日　増宮薨去につき宮内省へ天機伺いとして参朝、桜井大書記官に相談。それより会社へ出て16時に退社。上杉家を訪う。また土方へ例会に出席。佐々木、中村、安場、川田、若山等同席。御内儀向後変革の儀を相談に及ぶ。今日も秋雨歇まず、地上大いに潤う。

11日　朝、井上外務卿を訪い、本願寺の株金一條相談。その後君側の密話はこれあり。近日大いに尽力あるべき模様頗る長談義に及び12時前帰る。また品川線をやめ、市中を貫きたる方が得策と言えり。14時過ぎの汽車で伊藤参議を訪うも不在。それより松方を訪い詳しく君側の話を聞く。かつ、伊藤復命のことも聞く。帰途三縁亭にて晩餐、税所に立寄り、22時帰る。朝、7時馬車で上野に行き、それより荷車で林賢徳と本庄へ見分に赴く。熊谷より本間も同車し、松葉屋にて午餐。熊谷に帰り、客車に乗り換え、19時上野着。当月4日本庄まで線路開通。本日昼まで雨しきりに降る。

13日　大風晩景に止む。歯医者に行き入れ歯す。代金4円。税所に行く、下条も来る。同道して末川を訪い、直ちに帰る。

14日　今日、理事会にて星への返答穏便の方に決定。庄田の論大いに力あり、やや安心せり。開業式来春まで延引の儀も決定。木挽丁の塩湯に下条と同行す。帰途洋食を食す。

15日　上州一宮駅狩野保平蔵幅の画を観んことを税所、本田、下条と約し、本日7時に家を出上野に着く。三人は既に到着しており8時の汽車に乗る。この日大雨にて11時に熊谷に到着すれども猶止まず。ゆえに一宮行きを中止し、清水屋に入って午餐。武井万平も来たり、画を見る。雪舟の山水蛇足花仙可翁の観音などいちいち好品なり。16時30分の汽車で帰京、19時上野着。この夜、雨後明月、これを車中より観るに、時々刻々、景色改まり、真に奇観なり。浦和より細川潤次郎同乗せり。

16日　島津公の世子徳之助殿夭亡の知らせあるにつき15時頃より参上し、内田仲之助に悔やみを申上げる。柳原前光氏を訪い、露国の事情を聞く。帰途、税所に寄る。宮島も来ていた。晩餐後塩湯に入り、歩いて帰る道すがら、君側云々のことを話す。

17日　晩景、奈良原繁来訪、伊藤博文対面ケ原開拓地見分として差し越えられ候につき是非相誘引候よう申され候につき、気張りくれ候とのことにつき承諾いたし候。

18日　今日出社し、福島県下出張の儀を林等に連絡。税所来社、前条の件を告ぐ。岩崎弥太郎を訪い、二十日会の儀を断る。得能へ立寄る。税所に招かれ、夜、紅葉館へ行く。吉豊文兄弟、川森等来る。

19日　今日出社し、松永処分の評議、駅長を免じ候に決定。今日、たけ十七回忌につき祭事営む。税所、中沢、大脇父子等と会食。幸蔵もおともも来る。子供等にはみな昼飯を供す。旅装も昼間のうちに調える。

20日　朝、5時半大久保と同車で千住に行き、伊藤博文と会い8時過ぎに出発し、中田で午餐。昼前より大風雨となり、道路泥濘その難儀言うべからず、漸くにして17時頃小山着。宮の泊まりを縮めここに一泊。

21日　早朝小山出発、宮の手塚屋にて午餐。栃木県令藤川、郡長河村伝蔵福島県一等属中山高明等出迎える。今日も道路甚だ悪しく困難を極めたり。阿久津川を渡り、薄暮大田原着。矢板武、印南文作等出迎える。品川弥二郎、武井守正等も来会す。

22日　早朝、大田原を発し、白河にて午餐。郡山に宿す。福島県書記官等白川まで出迎え、郡山駅端に学校生徒等出迎え。

23日　本日、対面ケ原開拓所見分す。土佐、因州、備前等の士族の手になるものなり。そのうち、備前の人小松健太郎夫婦の開拓に熱心なる、実に殊勝の人也。道に水道を見分し、小蒸気で猪苗代湖上を渡り、十六橋にて暫時休憩。ここへ若松の士族総代56名出迎える。若松駅口に三島県令その他出迎え。日新館という学校で剣術などを見る。夜、東山に一泊。

24日　朝、東山の宿を出て、若松より山王峠までの新道を、

伊藤、品川等見分するを以て余も同伴す。道程16里、岩を穿ち、石を砕き、実に驚くべき工事なり。皆人感嘆せざるなし。峠にて同行の人々と別れ、余は中山高明と二人で横川という山駅に宿す。戸数2、30軒の小村なり。戊辰の役に桐野利秋がこの口より若松に向かい、2日戦争ありしという。その年、利秋と若松に会し時紅葉実に妙なりと語りしことどもあり。懐旧の感慨無限。本日峠にて伊藤と別るる時、君側のこと元田に相談せよとの依託あり、片時も忘れず甚だ感服。

25日 朝、横川を発す。余は駕篭、中山は馬。尾頭峠というこの辺の有名な峠を越ゆ、険阻いうべからず。頂上より那須ケ原見え、塩原に至り午餐。入浴の後諸所を見分す。この地は名妓高尾の出たる所なりという。これより山路3里、山水の景色の絶妙なる言うべからず。故に険阻もあえていとわず。程なく関屋といえる地に到着。雨降りだし、甚だ困却。それより那須野ケ原に出て薄暮三島の開拓場に着き、一泊。那須野ケ原の広漠たるに驚く。

26日 今朝、開拓係吉田一次等と馬車で諸所を見分。中山と別れ、西郷、大山の開拓場那須開墾社の事務所に至る。咲山に出て印南良作の家に立寄り午餐を振舞わる。やや久しく話し、17時頃宇都宮に着き、手塚屋に一泊す。河村郡長来談。

27日 7時に宇都宮を出て、11時に栃木着。藤川県令出迎え、某楼に上り午餐を振舞わる。線路などの評議に時を移す。14時同所を出発、大平山下を通り、佐野、館林より川俣に出て利根川を渡る。川幅何間有やと舟子に問うに、三五〇間ありて古来両岸の崩れしことなしと言う。それより行田を経て鴻ノ巣に着く、21時ごろなり。駅長の福田を呼びて話し、寝に就く。

28日 今朝一番の汽車で熊谷に行き、それより榛沢に至る。井上外務卿夫婦新田より帰るのに会い、同車して帰京。荒川と幸蔵、熊谷まで迎えに来る。

29日 今日出社。岩倉殿の子息達熊谷に行き、帰りがけ上野精養軒にて晩餐、林賢徳等と相伴。今夕、一柳鵬北、梅塘、栗香等来たり話す。喜連川より持ち帰りたる鮎を馳走す。井上馨氏より昨日の礼にとて鮎到来。

30日 今日、退社の途中元田を訪い、近日の御模様を拝承。帰途、得能を訪う。15時より税所に行き、木場も来て久々に会う。宮島も来る。

10月2日 本庄まで開業の儀井上局長と打ち合わせす。勝氏を訪う、長々病気のうち近頃よほど快しという、西郷の子供のことなど話す。

3日 退社の途中木挽丁の塩湯に入る。宮島来る。帰途洋食店に入り晩餐。それより歩いて帰宅。税所来ている。22時ごろまで話す。

4日 今日、8時の汽車で税所、本田と本庄まで行く約束をし、7時に家を出て上野に行く。両人先に来て待ちいたり。雨模様なりとて両人行くのを止める。余は川口へ行き、架橋の景況を見、国沢とやや暫く談話して帰

る。

5日　朝より、所労、終日臥床。

6日　探幽百十年祭を十代の孫探美が紅葉館にて執行し、諸家の蔵幅を展覧せしむ。全て三幅対なり。およそ50組程出品あり。帰途、下条、税所、本田と塩湯に行く。

7日　外務卿を訪うも不在。井上局長に行き、松本荘一郎採用の件並びに第二区建築の事を話す。それより麻布祥雲寺に参詣し、所蔵の書画を拝見、和尚より昼飯を馳走になる。茶の湯に熱心にて風雅の僧なり。見るところの書画名幅多し。帰途松方を訪い、君側の談に数刻を移す。それより塩湯に行き、税所にて晩餐。

8日　今朝、名尾産気にて苦しむ。昨夜より大風雨、終日甚だ困却。大久保昨夜帰りしとて来訪。

9日　荒川の洪水、それぞれ手当てに及び候旨連絡あり。伊藤博文を訪い、晩餐して帰る。

10日　荒川の洪水につき、7時に家を出て上野に行く。様子あらあら分かる。人力車を雇い、谷中より七面坂を下り、田畑を経て王子に出て（原注――この道の辺全て植木屋にていと風雅なり）川口に至る。川口にて乗客を降ろし、橋上を歩行せしむ。これ、水勢愈々増し、甚だ危険なるによる。帰途、中熊にて午餐。米花堂の例会に出る。若山が主なり。

11日　工部省に出頭。岩崎にて田中治右衛門の琵琶を聞く。土方、税所、大久保同席す。

12日　退社後塩湯に行く、宮島も来る。税所にて晩餐。雨しきりに降る。名ほ産気、腰痛甚だしく大いに心配し、終夜眠らず。今日、本庄開業延引の段申し来る。

13日　朝、6時ごろ男子出生、母子ともに無事、誠に安心せり。今日又大風雨にて困却。工部省に出頭。それより出社し新聞広告取り消しなどを命ず。夜、大山にて晩餐。晩景より風も止み、十三夜の月さやかにていと面白し。

14日　税所、豚肉持参につき、料理して午餐。夕刻より同道して塩湯に行く。吉田弘蔵より鉄道の荷物方の悪弊云々を聞く。

15日　塩湯に入り帰宅後閑居。

16日　牧野伸次郎英国より帰国につき、今朝立寄る。西郷菊次郎もきて、鹿児島の様子を聞く。米花堂にて元田先生書経の講義あり、今夕尭典終る。

17日　神嘗祭につき休日。午後より税所と勧工場書画展覧場に入る。晩景奈良原の招きでゆく、伊藤、山県、松方、三島等同席す。井上局長より21日から本庄までの開業差し支え無き旨の知らせあり。

18日　上野に行き開業の一條云々に就き報告する。今日気分優れず、塩湯に行き、一浴の後睡眠、漸くにして帰宅、保養。

19日　副島老来訪、談話やや久し。伊藤に面会の約束をする。午後工部省に出頭、局長と開業一條を談ず。

20日　益田孝宅にて書画小集会あり、出席。ヘネロサ氏、ブリングリー氏も来る。帰途塩湯に行き、後税所に行く。

21日　今日より熊谷本庄間営業開始につき、6時に家を出、上野発7時の汽車に大蔵省郷純造はじめ係員数名、並びに会社の理事と同乗。深谷で人民煙火を放って祝う。総代45名余に面会を求む。和歌二首を送る、各々喜ぶ。本庄の小倉山房にて主食を振舞う。赤城、榛名、日光の諸山眼前にあり。その景色甚だ佳なり。15時30分の汽車で帰京。

22日　今朝、安城、矢板、印南等来訪。得能を訪う、病状変わりなし。老人の嘆く様聞くに忍びず。元田先生の論語の講義を聞く。宮島来訪、外務卿トリクーと云々の話を聞く。

23日　折田正介来訪、三島の栃木県兼摂のことを聞く。よって大山に相談する。天長節の際、高崎鎮台の兵乗車の件につき白杉来社。宮島と塩湯に行き、それより恒庵に同行。

24日　本田病気につき訪問。税所にて晩餐。帰途塩湯に行き、帰宅したるにお志っとの出産の由につき直ちに行く。別に異常なし。ただし孫はむなしかりしと。雨降りていと面白からず。

25日　昨日の不幸につき、今日不参。終日鍼治療にて休息。大脇、帖佐の周旋にて墓地10坪買う。寅治試験あり。

26日　今日も不参。鍼治療す。夕方より税所へ行き、家買い入れの約をなし、塩湯に入る。赤井梶蔵来訪、新藤五国光短刀持参、有国の剣返却す。西郷の子供病気につき慰問す。

27日　今朝、副島を訪い、同道して伊藤博文の高輪邸の門を叩く、談数刻に及び、午餐し13時過ぎに帰る。副島もいちいち同意、毫も間然するところなし、余も大いに安心せり。夜、高田慎蔵に招かれ大椿楼の宴に出席、後、芝居一幕を見て帰る。

12月1日　今朝、出勤の途中西郷に立寄り、天璋院殿葬送の際同車の約束をなす。高知県令田辺氏も来る。県治の次第巨細に聞く。昨日、得能に金三千円を下賜、従道持参したるに大いに有難がりたる次第の話あり。12時に会社より帰宅。雨天につき炉辺に閑居。大滝新十郎来訪。なほ、誕辰につき赤飯を炊く。（以上、「六」　以下次号）